

音声合成されて聞こえている。その裏では、学校紹介、理念、学生作品などビデオが流されている。ル・フレノアでは映像の制作が重視されていると聞いたがいかにフランスらしい。

IMIのブースには直径3m高さ5mほどの巨大な風船でつくった円筒があり、その上にIMIの授業をうつした映像を投影している。中には通信機をもったパフォーマーがいて、外の人とテレビ電話で通話し、パフォーマンスを行っている。緑色に怪しく光る風船の円筒は興味をひく。

新しいテクノロジーをアートに利用することはなかなか難しい。たとえば、ノートパソコンを作るような優れた実装技術を応用しコンパクトな作品を作ろうとしても、個人ですべてを開発するのはまず不可能といえる。大田区の町工場とアーティストを直接結びつけるオーガニゼーションがあれば、技術者がアートのために型をおこし、製作者として名を連ねることもできると思われる。一時期企業によるメセナ活動が流行したが最近下火であるのは、不景気であることだけでなく、作られた作品があまり面白いものではなかったからであろう。少なくとも企業側にとって協力したことが誇りに思えるようなものではなかったにちがいない。

アートとテクノロジーはたとえて言えば、ネットワークプロトコルの物理層とアプリケーション層のようなものではないかと思う。アートという表現を支えているのがテクノロジーであり、そしてその間のレイヤーがなければアートは成立しない。そのギャップを埋めることができる人材を育成したり、人的なネットワークを形成するのがこれらの教育機関の存在意義のひとつであろう。

◆「ルネッサンスジェネレーション'99」体験

石村源生

日本科学技術振興財団

このイベントの感想を尋ねられる度に、まとまった言葉で説明できずにもどかしさを感じてきたのだが、実はこの説明の困難さこそ、このイベントのテーマであると同時に、来世紀の人類の最重要課題の一つになるであろう「ヒトの心の研究」が抱える困難さを象徴していたのかもしれない。

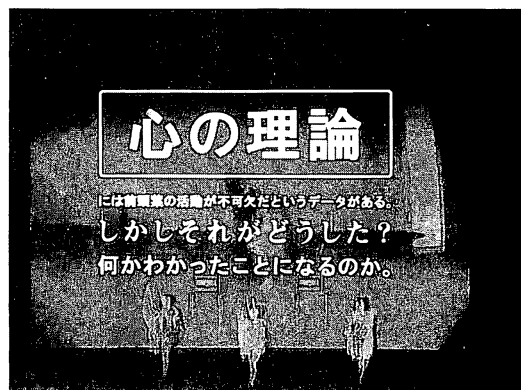
「ルネッサンスジェネレーション」とは、「次世代型創造者」を支援するための「21世紀へ向かい、可能性を追求する場」として金沢工業大学が1997年より主催している、

科学・芸術など諸領域の枠を超えたプロジェクトである。

第3回を迎えた今年度のテーマは「心の理論」であり、イベント冒頭、監修を行ったアーティストのタナカノリュキ氏と知覚心理学者の下條信輔氏が、それをめぐって対話を進めた。下條氏は、心の理論とは「他人の心の、存在と働きについて、(こちら側が)持つ仮説や信念」であると説明した後、3人の講演者に対してそれぞれ問題提起した。

続いてのレクチャーでは、霊長類学者の松沢哲郎氏がチンパンジーとヒトの遺伝的近接性やその驚くべき認知・学習能力を紹介し、ヒトと比較して論理階層は浅いものの、チンパンジーも心の理論を持つことを示した。また、ヒトの脳や心は「進化の産物」であり、だからこそ「進化の時空間的総体」の一端を担うチンパンジーの研究がヒトの心の研究に本質的に関係することを示唆した。

一方ロボティクスリサーチャーの浅田稔氏は、ユニークなアーキテクチャによる複数ロボットが、サッカーゲームなどの場面でどのように“協力”して問題解決を行うかを示した。協調行動をロボットに課すことによって他のロボットに対する「心の理論」を持たざるを得ない条件を設定し、その設計を通じて逆にヒトの心のメカニズムに迫るといふ、構成的アプローチの意義を解説した。



ここまでのレクチャーで聴衆の中には、ヒトが決して宇宙の中で唯一心を持つ孤独な存在ではない、という可能性に希望を抱いた者もいただろうが、逆にヒトの心の特権的地位についての自明性を崩され、徐々に外堀を埋められていくような不安を感じた者もいたであろう。それに対して哲学者の永井均氏は「比類なき、他の誰でもない私」という観点から、そういった科学的・工学的研究が決して到達しえない主観性の問題が存在することを強調して、勝負を土俵の中央に押し戻した。科学は複雑な現象の基本原則を解明し、工学は複雑な問題を構成的に解決するが、そもそも「問題そのもの」の所在を認識し、それを指し示さなければならないことを改めて感じた。

その後舞台をホール後方のホワイエに移し、講演者3名に下條氏を加えての“バトルトーク”が行われた。演者、聴衆共にリラックスした雰囲気の中で行われたトークには独特の味があったが、逆にその「枠の無さ」にとまどいを覚えたのか、今ひとつ「バトル」に至らなかったのは残念である。

後半はタナカノリュキ氏演出の、映像と音楽とダンスによるコラボレーション・パフォーマンスが行われた。心の研究の過程でしばしば遭遇する「自己言及性」「多重性」「層構造」「共鳴」「アンビバレンス」「モデル化」などの概念がモチーフとして散りばめられながらも、その圧倒的な光と大音響と単純な解釈を許さないパフォーマンスによって、アカデミックな（お行儀のよい）講演会を予想していた参加者たちは言葉を失っていた（ここで告白するが、筆者も途中から聞き直して耳を塞ぎつつ、そのコミカルな状況に笑いを禁じ得なかった）。

「ヒトの心の研究」は大変深遠なテーマであり、とうてい一つの分野の専門家によって担いきれるものではない。しかし、「コラボレーション」「境界領域」「アート&サイエンス」という標語を力強く唱えてみても、ふたを開けてみれば単に同じ時間と空間に居合わせたというだけのものに終わってしまうことがしばしばあり、その理由の一つとして専門家同士の「遠慮」「お行儀の良さ」が考えられる。このイベントの場合、実際の結果については個々人に評価をゆだねるとしても、その趣旨は「仲良く一堂に会す」というよりは、むしろ「挑戦」「挑発」であり「相互侵犯」

でさえあったと思われる。その意味で、ヒトの心の研究文化の未来像について貴重な問題提起をしたのではないだろうか。波紋は確実に広がりとつあると思われる。

一方、今後も様々な場で展開されていくであろうこのような試みについて、いくつか考慮しなければならない点もあると感じられた。

まず、そもそも歴史上、学問と芸術、科学と工学、あるいは諸学問内部においてなぜ「専門分化」が生じたのか。その前提条件について、現代的視点から再確認する必要がある。なぜなら、この諸条件が現代において「変化」しているときにのみ、専門領域を再び何らかのかたちで融合させようとする行為が、「その変化に固有の」意味を持つからである。

その上で、上記のような「コラボレーション」「統合」を行うためにはどのような場の設定が望ましいのか、どのような共通言語、理論的枠組みがあればよいのか、目的や資源、道具として何を共有できるのか、といった点について検討していく必要がある。そういった意味で、「専門分野を乗り越えるためのテクノロジーを開発する」専門家が必要なかもしれない。しかるに、そのような専門家を産み出すことが正に、“ルネッサンス ジェネレーション”というプロセスが目指している「循環的」「自己創出的」機能なのであろう。

(1999年9月25日、恵比寿ザ・ガーデンホール、主催：金沢工業大学)